カイ KAI　ill. たわん



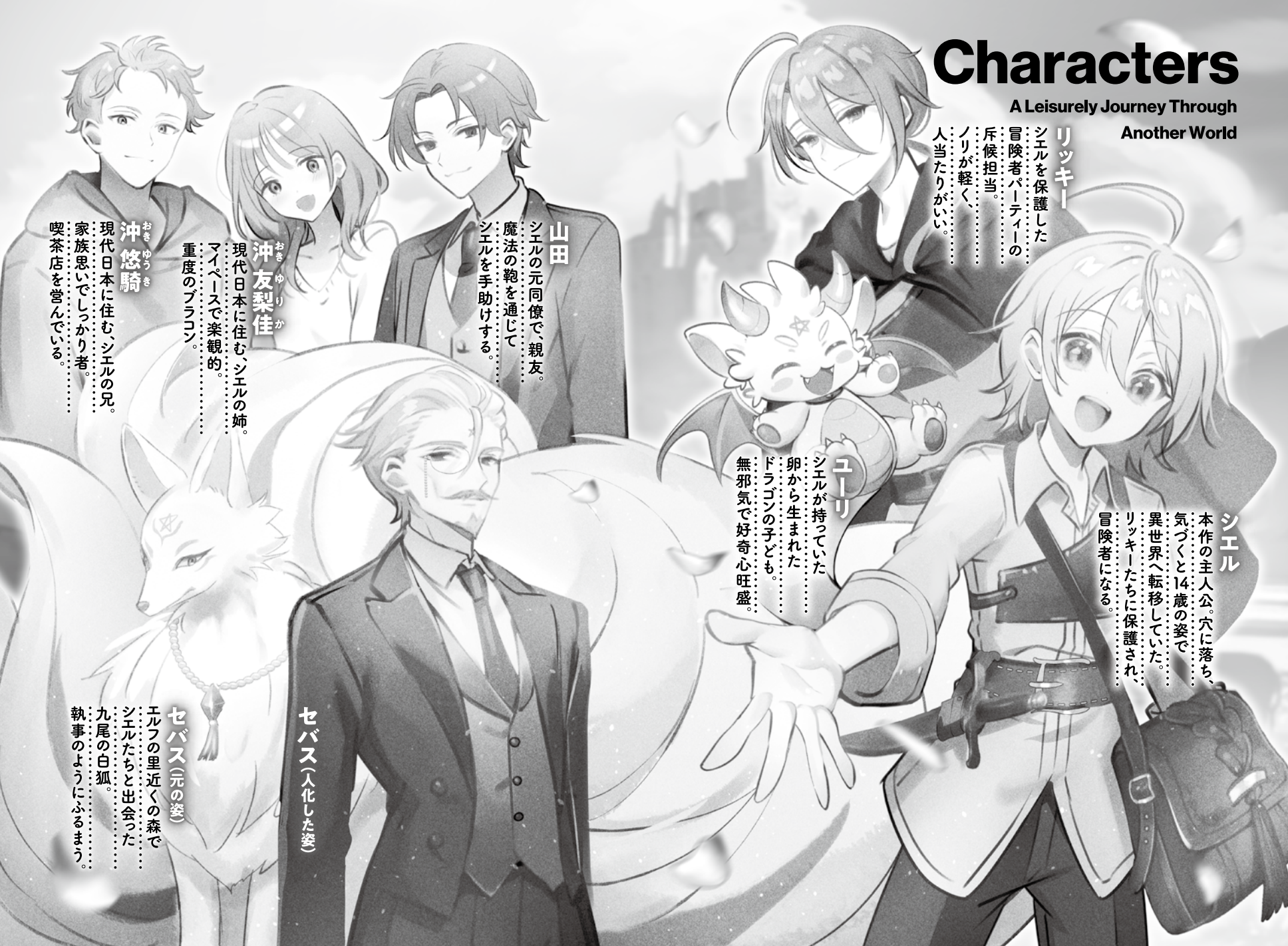
異世界のんびり漫遊記

子ドラゴンと冒険者ライフを楽しみます

2

Characters

A Leisurely Journey Through Another World



シエル
本作の主人公。穴に落ち、気づくと14歳の姿で異世界へ転移していた。リッキーたちに保護され、冒険者になる。

リッキー
シエルを保護した冒険者パーティーの斥候担当。ノリが軽く、人当たりがいい。

ユーリ
シエルが持っていた卵から生まれたドラゴンの子ども。無邪気で好奇心旺盛。

山田
シエルの元同僚で、親友。魔法の鞄を通じてシエルを手助けする。

沖友梨佳（おきゆりか）
現代日本に住む、シエルの姉。マイペースで楽観的。重度のブラコン。

沖悠騎（おきゆうき）
現代日本に住む、シエルの兄。家族思いでしっかり者。喫茶店を営んでいる。

セバス（人化した姿）

セバス（元の姿）
エルフの里近くの森でシエルたちと出会った九尾の白狐。執事のようにふるまう。

第一話　兄姉の来訪

現代日本でのんびりと社会人を謳歌していた俺、沖紫恵琉。
同僚で親友の山田との飲み会後に一人で夜道を歩いていたら、変な店を発見しておかしなものを購入してしまった。
その後、なぜか深い落とし穴のようなものに落ちてしまい……気づくと見知らぬ森の中にいたのだ。
森の中で俺は、簡単に魔物を討伐していく頼もしい人たちと出会った。
彼らは見知らぬ俺にとても優しく接してくれ、たった一人でいた俺にとっては恩人そのものだ。
その後、常に行動をともにした彼らは、俺を自分たちのパーティーに引き入れてくれた。
そんな時、ひょんなことから現代日本にいる山田から連絡が入り、サプライズとして魔法の鞄を通じて俺の実の兄姉をこちらの世界に送り込んだと知らされた。
おかげで異世界で家族と再会できて、心細かった俺は涙が止まらなくなってしまったのだった。



◇
◆
◇

「ごめんな、姉さん、兄さん……勝手にいなくなる気なんて全くなかったんだ。まさか異世界に落ちて、二度と戻れなくなるなんて思ってもみなかったんだ。本当に、心配かけてすまない」

俺は泣きながら二人に謝った。

すると二人は俺を抱きしめながら、頭を撫でてきた。

その温かい手のひらが、たった一人でこの異世界に来させられた俺の、不安や緊張なんかが入り交じったなんとも言えない感情を、温かく溶かしていってくれる気がした。

しばらく三人で再会の喜びに浸っていると、ユーリが急に喋り出した。

『パパ、その人たちって、まだみんなには会わせないんでしょ？　なら部屋の鍵はかけておいた方が安全じゃない？』

確かにそうだ、急にドアを開かれたら困るな！

俺は慌てて鍵をかけに行った。

そして振り向くと、二人がものすごく驚いた顔でユーリを凝視していた。

「……い、今、そのドラゴンの置物、喋らなかったか？」

「そんな気がしたけど……気のせいよね、兄さん？」
なるほど、ユーリはテーブルの上で身動きしないようにしていたから、二人には置物のように見えたんだな。
「兄さん、姉さん、それは俺の従魔のユーリだよ。ドラゴンの赤ちゃんなんだ！」
俺はそう言ってユーリに腕を広げた。
するとユーリは嬉しそうに飛んできて、定位置の腹にしがみつき、頭を俺の胸にスリスリしてきた。可愛ええのぉ～♪
あまりの可愛さに、思わず俺もユーリを抱きしめた。
すると二人はさらに驚いたのか、目をめいっぱい見開き、口もあんぐりと開けている。
その様子を見た俺はくすくす笑いながら二人に近づき、ユーリを間近で見せる。
ユーリもその意図に気づき、二人に向かって笑顔を見せた。
『はじめまして、僕はユーリといいます。パパの魔力のおかげで産まれることができたんですよ！』
ユーリが挨拶すると、兄さんの方が先に正気に戻ったようで、挨拶を返した。
「俺は紫恵琉の兄の悠騎（ゆうき）という。ユーリといったか？　これからも紫恵琉のことをよろしく頼むな」
すると姉さんも慌てて挨拶する。
「ユーリちゃん、私は紫恵琉の姉の友梨佳（ゆりか）といいます。これからもよろしくね！」

ユーリは二人の挨拶を受けて『うん、僕、パパの役に立てるように頑張る！』と言った。
立ち話もなんだからと、俺は二人をソファーへ誘う。
三人と一匹で座ると、すぐさま二人から何があったのか質問攻めに遭った。
二人は俺の話を黙って聞き、たまに相槌を打ったりしながら最後まで聞いてくれた。
「……大変だったんだな、紫恵琉。何はともあれ、お前が死なないで、こうやって無事に会えたのは良かったよ」
「ええ、ホントにそうよね！　私なんてもう二度と会えないのかと思って、目の前が真っ暗になっちゃったもの。もう電話でしか話せないのかと思っちゃったわ！」
二人からそう言われると、ホント、申し訳ない気持ちになる。
俺は口を開く。
「こうやってまた会えたんだから、たまにはこっちに顔を見せに来てね。俺はそっちに帰れないからさ……」
言いながら俺がしょんぼりすると、二人は慌てて「もちろん遊びに来る。なんなら毎日でも！」と言ってくれた。だけど、考えてみればそれは無理なんじゃないかな、鞄は山田が持ってるんだし。
「それにしてもお前、中学生くらいに戻ってないか？　ちょうど今日、山田君にお前のアルバムを見せたんだけど、ちょうどそのくらいの時のお前にそっくりだよ」
……山田に俺のアルバム見せたんかい！　まぁ、変なのないからいいけどさ！

「だってステータス上は十四歳だからね。まさに中学生に戻ったんだよ」
「えっ、しーちゃん、中学生に戻っちゃったの!?　いや〜ん、もうちょっとで私の天使ちゃんじゃなくなる年齢じゃない！　どうせならもっと幼くなったらいいのに！」
いや、姉さん、あまり幼くなると俺が魔物に殺されやすくなるから！
ここ、異世界で危険がいっぱいだから!!
「……姉さん、この世界がとても危険な世界だってこと、忘れちゃった？」
すると姉さんは「あっ！　そうだったわね……」と複雑そうな顔をした。
気を取り直し、俺は実際の武器なんかを二人に見せた。
日本ではこちらで言う「武器」にあたるものは所持できないからね。
見るのも初めてなんじゃないかな？
「今、俺が持っている武器なんだけど……どうやら過去にこっちに来た日本人が打った日本刀らしいんだ！　なんか不思議だよね〜、俺たちの先祖も武士だったらしいし。不思議なご縁だと思わない？」
俺の日本刀を手に取って眺めていた兄さんが、それを聞いて何かを思い出したように「あっ！」と声を上げた。
「そういえば思い出した。お前たちは知らないだろうが、実はうちの蔵には本物の日本刀があるんだ。これは歴代の当主にしか伝えられないことだから、お前たちは見たことないと思う。で、その

日本刀だが、どうせ日本にあってもしょうがないからお前にやるよ。いつか来る時に持ってくる」
……えっ、うちの蔵にはそんな物が眠っていたの!?　そんなの知らなかったよ！
俺だけでなく、姉さんも驚いている。
蔵には危険物もあるから近づくなと父に言われていたけど、ホントだったんだな！
「……でも、それって悠馬に渡すものじゃないの？」
俺がそう言うと、兄さんは首を横に振った。
悠馬っていうのは兄さんと妻の恵美さんの息子で、俺の甥にあたる。年齢はちょうど今の俺と同じだ。
二人は大学時代の同級生で、卒業したらすぐに結婚したんだよね。
「悠馬には武術の継承だけでいいと思う。本物の日本刀なんて持っているのがばれて、何かあったら嫌だしな」
俺たちの一族の男児は、ご先祖様から続く「刀」の扱い方を幼い頃から学ばされる。
もちろんそれは、俺も同じだ。
とはいえ異世界に来て、魔物とはいえ生き物を相手に実際に戦った時は、初めてだったからものすごく勇気がいったけどね。
リッキーさんに色々教えてもらっているうちに当時の感覚も思い出したし、リッキーさんには感謝だね！

ともかく、多分、それがあったからゴーダさんに刀を譲ってもらえたんだと思う。
……そう考えると、ある意味ものすごい偶然のご縁だよなぁ。
「じゃあ、もしかしてだけど、兄さんと悠馬はこっちでも戦えるんじゃない？」
俺がそう言うと、兄さんもその可能性に気づいたようだ。
「そうだな、お前が戦えるってことは、俺もできる可能性があるってことだよな……？」
「じゃあさ、できるか分からないけど、『ステータスオープン』って言ってみて！」
俺が促すと、二人は揃って「ステータスオープン」と言った。
……なぜ、姉さんまで言った？
「どう？　画面出た？」
「なんか目の前に透明な板が出てきて、文字が書いてあるんだが……この数値が高いのか、よく分からんな」
「右に同じく！」
なるほど、確かに二人は基準値が分からないもんな！　って、俺も分からないけど！
「じゃあ俺が鑑定して二人のステータスを見るけど、いい？」
俺は二人にそう断ってから鑑定をかける。
まずは兄さんからだ。

『鑑定結果』
【名　　前】沖悠騎
【種　　族】異世界人
【年　　齢】三十七歳
【職　　業】喫茶店の店主
【レ　ベ　ル】１
【体　　力】２５０
【魔　　力】50
【攻　撃　力】２８０
【防　御　力】２００
【素　早　さ】１９０
【　運　】３３３
【ス　キ　ル】剣術……レベル９
【固有スキル】ボーイスカウト
　　剣の師範
【称　　号】異世界から来た異世界人の兄

……な、なるほど、固有スキルって、自分の過去の経験から作られるのかな？
兄さんは小さい頃からボーイスカウトに通っていたし、うちの一族の中では直系なのもあって「師範」の地位にいるしね。
だから剣術のレベルも俺なんかよりも全然高いし！　さすが師範！
さてさて、姉さんもなぜかステータスを開けたみたいだし、鑑定してみるかな！

『鑑定結果』
【名　　前】沖友梨佳
【種　　族】異世界人
【年　　齢】三十二歳
【職　　業】会社員
【レ　ベ　ル】１
【体　　力】１５０
【魔　　力】３００
【攻　撃　力】１３０
【防　御　力】１００
【素　早　さ】２２０
【　　運　　】３３３
【スキル】水魔法……レベル１
風魔法……レベル１
光魔法……レベル１
【固有スキル】ガールスカウト
【称　　号】異世界から来た異世界人の姉

姉さんはやっぱり女性だからか、兄さんより全体的に数値が低いね。
でも、兄さんと違って魔法が使えるんだね！
魔法のレベルはこれから上げればいいんじゃないかな？
それに固有スキルのガールスカウトも、本人が過去に行っていたものだしね。
やっぱり固有スキルってそういうものなんだね。
「兄さんたちのステータスを見たけど、森の浅いところなら普通に狩りとかできると思うな」
俺がそう言うと、二人ともなんかワクワクした顔をした。
「でも今は俺、仲間がいて、その人たちと行動をともにしているんだよ。だからすぐには一緒に行けないかも……？　特に明日はみんなとギルドに行ったりする約束をしているから、街の案内とかは無理かな」

「なんだ、それは残念だな。山田君は明日も休みらしいから、この際うちに一泊してもらって、また明日俺たちをここに送ってもらって街を楽しもうと思っていたのにな」
残念そうな顔をした兄さんがそう言うと、姉さんもがっかりした顔をして言った。
「で、でも！　もし良ければ買い物くらいは行ってもいいかもだし、明日聞いてみるよ！」
俺がそう言うと、それまでずっと黙っていたユーリが急に話し出した。
『……パパ、まだ仲間に家族の紹介は早いよ。もう少しそこの二人がこの世界に慣れてからにしたら？』
なるほど、そういう考えもあるか。
じゃあスノーホワイトと兄さんたちの団体行動は、ちょっと無理か？
なかなか楽しそうだと思ったんだけどなぁ。
「いいよ、お前の仲間に無理矢理会いたいわけじゃない。お前と出かけたいだけだからな。だからそこだけ聞いてみてくれないか？」
「うん、分かった！　明日の朝、聞いてみるね！」
それから俺たちはお互いの近況なんかを話して過ごした。
その空気感が異世界にいるとは思えなくて。
……なんかお盆や正月に実家で集まったような、そんな感じだな。
ふとそんなことを思って、俺はくすっと笑ってしまった。

兄さんたちは一旦家に帰って寝て、また明日こっちに来ることになった。
最初は姉さんが「しーちゃんが子どもに戻ったんだから一緒に寝るの！」なんて言って兄さんを困らせていたが、「さすがに中身は大人なんだから勘弁してくれ」と俺が頼みこんで、やっとなんとか帰ることに同意してもらえたんだよねぇ……
ブラコンも度が過ぎると大変だよ。
それにユーリがまた「……なるほどね」なんて言っていたし……一体なんなんだ？？？
この前から、たまにユーリが変なことを言うよね。
本人（本竜？）に聞いてもはぐらかされるしで、よく分からないんだけど？
二人が帰る前に、俺は山田に連絡を取った。
「これから二人が帰るから鞄から出してやって」とお願いする。
二人にそれを伝えると、まずは兄さんが鞄の中へ手を突っ込んだ。
すると出てきた時とは反対に、手先からスルスルと鞄の中に吸い込まれていった。
……なんて衝撃的な光景なんだ。
あんなに小さな鞄の口に、あんなにデカい兄さんが歪みながら入っていくなんて……
あれは、誰もが驚くよね。
姉さんが続いて鞄に入ろうとしたところで、また「帰りたくない！」とぐずり出した。さっきま

ではこんな時姉さんを宥める兄さんがいたが、代わりに「また明日会えるから！」と説得して、なんとか帰ってもらった。
二人が鞄の中に吸い込まれてからしばらくすると、山田から連絡があり「二人は無事にこちらに着いているから安心しろ」とのことだった。
それは良かった。鞄の中に入ったはいいが、出られなくなったらどうしようかと思っていたんだよ。
それから俺とユーリは、ベッドに行って一緒に眠った。
今日は朝から色々とありすぎてすごく疲れたからなのか、それとも家族と会って色んな話をして安心したからなのか、目を瞑るとすぐに意識が沈んでいった。

◇◆◇

翌朝、食堂でみんなと朝食を食べながら、俺は昨日の話を切り出した。
「実は昨日、俺、家族と話したんです」
するとみんな訝しげな表情をしていたが、リッキーさんだけはその意味がなんとなく分かったようだった。
「……つまり、その鞄が関わっているんだろ？」

リッキーさんが言うと、スコットさんとエミリーさんも口を開く。
「そうか。じゃあ、ここでは話せない内容なんだな？」
「なら、食べ終わったらシエルくんの部屋に行きましょう？」

部屋に移動すると、早速スコットさんが「さっきの話を説明しろ」と言ってきた。
「実は昨日の夜、この鞄から俺の家族がこちらへ渡ってきたんです」
俺がそう告げると、みんな一様に驚く。
まあ、気持ちは分かるよ。だってこの鞄を通して来たのが、「物」じゃなく「生き物」なんだもんな。
「で、今はどこに？」
驚きから最初に立ち直ったのは、リッキーさんだった。
「今はまた、元の世界に戻っていますよ。ただ、俺がこの街にいる間に一緒に散策したいとのことだったんですよ」
「……なるほど。今日はギルドへは一緒に行くが、その後の買い物なんかは家族と行きたいってことだな？」
リッキーさんが聞いてきた。
相変わらず察しがいい人で助かるよ。

「ええ、昨日、ギルドに行った後の買い物は皆さんと行こうって話してたんですけど……」
「気にするな、やっぱり家族と過ごす方がいいさ！」
「あっ、じゃあギルドに行った後、ここに戻ってきましょ？　報酬を先に分けちゃえば、その後の買い物に使えるじゃないですか！」
「そうね、私たちもどうせだから買い物でもしようか」
スコットさんとリリーさん、エミリーさんがそう言ってくれた。
「ありがとうございます、皆さん。ホントは家族も一緒に皆さんと買い物に行きたかったんですが、ユーリがもう少し兄姉がこの世界に馴染んでからの方がいいって言うので……すみません」
それを聞いたリッキーさんが問う。
「……ユーリがそう言ったのか？」
「ええ……それがどうかしました？」
俺がそう答えると、リッキーさんは少し考え込んでしまった様子だった。
う～ん、何か思うことがあるのかなぁ？
「まぁ、そういうことならシエルは家族と出かけるといい。じゃあ……俺たちはどうする？」
「私たちも予定通り屋台でお昼でも食べましょう？　それからどうするか考えればいいと思うわ」
「じゃあ、まずはギルドに行きますか？」
そうしてとりあえずみんなでギルドへ向かうことに。

ギルドに向かう間も、リッキーさんは何やらずっと考え込んでいて、一言も話さなかった。
ホント、どうしたんだろう？

ギルドに着き、空いている受付に向かう。
時間的に、朝一で依頼を受ける冒険者たちの第一陣がすでに去った頃なので、ギルド内にはちらほらとしか人がいない。
受付の担当者はスコットさんたちの顔を知っている人だったらしく、すぐさま「ギルドマスターのところへ行ってくれ」と言われた。
受付を通り抜け、ギルドマスターの部屋へ向かう。部屋の前に着くとスコットさんがノックをし、声をかけてみんなで中へ入った。
すると、ソファーに座っていたギルドマスターのルーシェさんが手招きをしている。
俺たちはいつものようにソファーに座る。
「いつもきちんと予定通りに来る君たちだから、そろそろ来るかと思っていたよ」
ルーシェさんの言葉に、スコットさんが肩をすくめて言う。
「どうりで、もう座っていたわけだ」
「じゃあ早速だけど、まずはこの前の依頼の追加報酬を渡すね。上位種やキングが出ることは想定していなかったから、追加で報酬を出さなきゃならないんだよ。これがそれだ」

ルーシェさんは、どこからかとても重そうな大きい革袋を取り出した。
「それとこの前、君たちが解体に出したオークだけど、素材も肉も全て買い取りでいいんだよね？」
「ああ、全部買い取りで頼む」
「じゃあ、代金はこれでいいね！」
ルーシェさんはそう言うと、これまたどこからか、さらに大きな革袋を取り出してテーブルに置いた。
「じゃあ先に追加報酬の内訳から伝えるね！　上位種が一体につき金貨三枚だから全部で金貨十二枚、キングが一体で金貨二十枚の、合計三十二枚だよ。合ってるか数えてね！」
彼は小さい方の革袋をこちらへ押しやりながら言った。
スコットさんが中身を確認すると、間違いはなかったようだ。
「で、こっちが買い取り分の代金だよ。オーク一体につき銀貨五枚だから、百四十体で金貨七十枚、上位種一体につき金貨五枚だから四体で金貨二十枚、キングが一体で金貨三十枚、合計で金貨百二十枚だね。確認よろしく！」
ルーシェさんは、同じように大きな革袋もこちらへ押しやった。
それもスコットさんが中を一枚一枚確認すると、間違いなく百二十枚あった。
スコットさんは俺に革袋二つを渡し、鞄に入れるよう頼んできた。
すごく重そうだけど、鞄に入れれば問題ないもんね！

「さて、これで依頼に関するお金は全て精算したね。これで君たちはどこへでも旅に出ることができるようになったわけだけど、向かう場所とかは決めたのかい？」
「ああ。シエルが俺たちの故郷に行って、俺たちの親に挨拶をしたいんだとさ。だからまずはスノービークへ行く予定だ」
スコットさんがそう伝えると、ルーシェさんは少し考えてから言った。
「スノービークなら、僕の故郷のエルフの里と一番近い街じゃないかな？　それなら先にエルフの里に行く？　行くなら僕が送ってあげるよ？　エルフの里からなら、スノービークは森を抜ければすぐだよ」
そう言ってルーシェさんは俺を見る。
う～ん、どうするかなぁ……できれば最初に挨拶に行きたいところだけど、ここからかなり離れているって聞くしなぁ。
俺が考えていると、リッキーさんが話しかけてきた。
「シエル、先にエルフの里に行かないか？　俺たちの故郷に行くのはそれからでも大丈夫だぞ。その方が近いしな！」
「……そうですね、じゃあそうしますか？」
それを聞いたルーシェさんは、ポンと手を叩いた。
「じゃあ、決まりだね！　出発する時に、またここへ来てくれるかい？」

スコットさんが答える。
「ああ、分かった。多分出発は明日か明後日ってところだと思う。それまでに、ルーシェの方でも長老に話をしておいてもらえないか？」
「うん、そうだね。今夜にでも話しておくよ！」
「よろしく頼むな」
そして俺たちは冒険者ギルドを後にした。
まずは宿屋で今回の報酬を分けなければ。
俺たちは急ぎ足で宿屋に戻った。

俺の部屋に着くと、みんなでソファーに座る。
今日ばかりはスコットさんもテーブルのそばに来た。
みんなが落ち着くと、ユーリがおもむろに鞄から出てきて、俺の腹にくっつく。これも定位置だ。
「じゃあ早速だが報酬を分けよう。シエル、出してくれるか？」
スコットさんに言われて、俺は先ほど収納した革袋二つをテーブルに出す。
「全部金貨で、百五十二枚ある。そのままだと五人で割り切れないから、百五十枚を割ると一人三十枚になる。残りの二枚はシエルにやるよ」
そう言ってスコットさんは、みんなに報酬を配る。

俺には二枚多い三十二枚をくれた。
「さて、報酬も配り終わったし、俺たちは屋台に行って昼飯でも食うか？」
スコットさんがみんなに聞く。
するとエミリーさんとリリーさんは了承したが、リッキーさんだけは返事をしなかった。
スコットさんが再度尋ねる。
「リッキーはどうするんだ？」
「ん～……俺はシエルたちを連れて街案内をしようかな～？　どうだ、シエル？　一人くらい案内人がいた方が安心だぞ？」
リッキーさんはそう言って、なぜか俺ではなくユーリを見た。
ユーリは少し考えていたようだが、頷いて『いいよ！』と言った。
「じゃあ決まりだな。リッキー、シエルの家族に失礼のないようにな！　しっかりと案内頼むぞ？」
「分かってるよ。ちゃんと挨拶するって。安心しろよ！」
そう言って二人は拳を打ち付けあった。
エミリーさんとリリーさんは、そんな二人を見て肩をすくめる。
そしてスコットさんたちは部屋を出ていった。
残った俺たち二人と一匹は、ソファーに座り直した。
「それで、シエルの家族はいつ来るんだ？」

「こちらから連絡したら来ることになっています」
「じゃあすぐに連絡を取ってやるといい」
リッキーさんに言われて、俺はすぐに山田に連絡を取る。するとちょうど兄さんたちと一緒にいたらしく、すぐに伝えてくれたようだ。
やはり山田は昨日、俺の実家に泊まったらしい。

しばらくすると山田から「今、二人がそっちに向かったぞ」と連絡があった。
俺はすぐさま鞄に手を入れる。まず兄さんの名前をタップし、その手をつかんだ。そして前回同様に鞄から引き出す。
続いて姉さんも引き出した。
二人を鞄から出すと、俺はリッキーさんを見た。
すると案の定、目を見開き唖然として固まっていた。
そりゃそうだろうなと思って、俺はくすっと笑う。
三人はお互いに見つめ合ったままなので、俺は各々を紹介することにした。
「兄さん、姉さん、こちらは俺がこっちに来て初めて会ったこの世界の人で、名前はリッキーさんっていうんだよ」
「なるほど、彼はお前の恩人なんだな？　……初めまして、紫惠琉の兄の沖悠騎です。いつも弟がお世話になっているようで、助かります」
「紫惠琉の姉の沖友梨佳です」
二人に自己紹介されたリッキーさんは一瞬、俺を見た。
「初めまして、俺はシエルが入っているスノーホワイトっていうパーティーの一員で、リッキーといいます。こちらこそ、彼に助けられています。これからも仲良く助け合いながら旅をしていきたいと思っていますので、ご家族の方も安心してください」
「それを聞いてほっとしました。私どもは通常は元の世界にいるので、すぐ駆けつけることはできません。こちらであなたたちが一緒にいてくれることで、どれだけ紫惠琉が心強いことか。これからもよろしくお願いしますね」
二人が言葉を交わす間、姉さんはじっとリッキーさんを見ていた。まるで観察しているかのようだ。
「どうしたの？　姉さん」
「……ん？　ああ、リッキーさんがどんな人なのか、ちょっと見ていただけよ。なんかいい人そうで安心したわ。しーちゃんも体に気をつけて過ごすのよ？」
「うん、分かってるよ」
俺と姉さんが話している様子を、リッキーさんもじっと見ている。
話が落ち着く頃、リッキーさんが口を開いた。

「それじゃあ挨拶も終わったし、街を散策しつつ買い物をしますか。今日は俺が三人の案内役になるので、迷子になったりはしないから安心してください」
それを聞いた兄さんが安堵したように言う。
「リッキーさんが案内してくれるんですね。それは心強い。さすがに紫恵琉に案内されるのは、ちょっと不安があったんです」
えっ、兄さん、俺が案内役だと不安だったの？
……でもまぁ、あながち間違いでもないか。
俺は別に方向音痴じゃないけど、ここに来てまだ半月だもんな。
どこら辺にいい店があるとか分からないし。
リッキーさんが一緒に来てくれるっていうのは、実際助かるよ！
ありがとう、リッキーさん！

そして俺たちは揃って宿を出る。
ちょうどお昼時なので、まずは屋台で腹ごしらえすることになった。
「お二人はどんなものが食べたいですか？　この屋台には肉も魚もスープもサンドウィッチもあるので、とりあえず食べたいものを教えてください」
リッキーさんが歩きながら尋ねると、二人は少し考えてから返事をした。

「俺は……やっぱり肉かな。さすがに異世界だし米はないだろうから、メインはサンドウィッチにするか。でもスープもあった方がいいかなぁ……？」
「兄さんは優柔不断ね！　私はサンドウィッチとスープにしようかしら。紫恵琉はどうするの？」
姉さんに聞かれた俺はにやりと笑い、おもむろに鞄からこの前買ったおにぎりを取り出す。
「実はね、この世界……なんとお米があるんだよ！　だから俺はおにぎりと串焼き肉、スープにするつもりだ！」
そう言いながらおにぎりの包みを開けて中を見せると、二人とも驚いたようだ。
「まさか米があるとはな！　紫恵琉、俺にもくれないか？　やっぱり今はパンより米が食べたいんだよ。あとは俺も串焼き肉とスープがいいな」
「え～っ、兄さんばっかりず～る～い～！　おにぎりがあるなら、私も食べたいわ！　私はそれに魚とスープにするわ！」
そのやり取りを聞いたリッキーさんが、自分も鞄からおにぎりを出して、二人に包みを開いて見せた。
「シエルはこの前そんなに買ってなかったので、俺のをあげますよ。味は選べませんが。それで良ければどうぞ」
「いいんですか？　あ、でも屋台に行く前に買えるようなら、寄ってから向かいませんか？　それなら色々買えますし」

「ああ、それもいいですね。じゃあ、まずおにぎりを買いに行きますか」
街の中央にある屋台広場に向かっていたが、急遽、米屋の前にあるおにぎり屋さんに向かうことになった。

しばらく歩いて米屋さんに着くと、やはり今日も店前でおにぎりを売っていた。
何があるのか眺めていると、お店の人が声をかけてきた。
「いらっしゃいませ！　何かお求めですか？」
するとすでに注文を決めたらしい姉さんが口を開く。
「この鶏そぼろの入ったおにぎりと、豚角煮が入ったおにぎりをください。兄さんは何にする？」
「俺は……魚を焼いたのが入っているおにぎりを一つと、肉を甘辛く煮たものが入っているおにぎりを二つください。紫恵琉はどうする？」
「俺も魚を焼いたのと肉を甘辛く煮たの、あと鶏そぼろを三個ずつください。あ、お会計は三人分まとめてお願いします」
俺たちの注文を聞いた店員が素早く計算する。
「おにぎり十四個で、銀貨二枚と大銅貨一枚です」
「じゃあこれでお願いします」
俺はそう言って金貨一枚を渡した。

店員は再び素早く計算すると、お釣りを渡してくれた。
俺がお釣りを財布に入れている間に、リッキーさんがおにぎりを大量に買っていて驚いた。
……まだ鞄の中にいっぱいあるよね!?

無事おにぎりが買えたので、俺たちは屋台に向かう。
目当ての屋台までリッキーさんが案内してくれたので、案外早めに昼飯を購入できた。良かった！
みんなで屋台広場にあるテーブルに向かう。
もしかしたらスコットさんたちがまだいるかもしれないと思って、きょろきょろ見回してみたが、もういないみたいだ。
空いている四人がけのテーブルに座る。
それぞれ購入してきた昼飯を出す。
兄さんは宣言通り俺と同じおにぎりと大きな串焼き肉、俺も食べたことのある鶏肉みたいな肉が入った野菜スープを買っていた。
姉さんもおにぎりとスープは同じで、それの他に浜焼きみたいな焼き魚が串に刺さっているものを購入。魚は近くの川で獲ってきたものなんだって！
リッキーさんはおにぎりと肉野菜炒めみたいなものと、スープにしたようだ。

スープはみんな同じ店で買ったんだけど、いくつか違う味のものが売っていたんだよ。
定番の鶏塩味、醤油味、少しピリッと辛いチゲみたいな味があった。
鶏塩は俺と兄さん、醤油は姉さん、チゲみたいな味はリッキーさんが選んだ。
……チゲ味、俺も少し飲んでみたいかも！日本では意外と辛いの好きだったんだよね！
「じゃあ、いただきますしようよ！」
俺のかけ声で、四人、手を合わせて……
「「「いただきます！」」」
みんなお腹が空いていたのか、しばらくは無言で食べていた。
だがやはりというか、姉さんが俺のスープを一口欲しがった。
まぁ、いつものことだからいいし。俺もリッキーさんから一口もらおうっと！
「リッキーさん、そのスープ一口もらえますか？　どのくらい辛いのか試してみたくて。飲めそうなら今度買いたいですし」
「ああ、いいぞ。意外と辛いだけじゃなくて、野菜の甘みや肉の旨味が溶け込んでいて美味いぞ？」
それはぜひ飲んでみたい！
俺はリッキーさんからスープの器を受け取ると、一口飲んでみる。
リッキーさんが言った通り、辛味の中に甘みや旨味が混在していて、とても美味しかった。
よし、次にあのスープ屋さんに行ったら辛いのを鍋で買えるか聞いてみよう！

その後も、俺の串焼き肉と姉さんの焼き魚を半分交換したりして、なんだかんだで色んな種類を食べられた。大満足の昼食になったよ！

昼食を食べ終わると、俺の買い物に付き合ってもらうことになった。
今は服がほぼないので、服屋さんに行きたかったのだ。「それならば……」と、リッキーさんがおすすめのお店へ連れていってくれた。
そこは冒険者御用達というような佇まいの店で、服だけじゃなくて防具も色々と売っていた。
そういえば、俺も今までは遠距離攻撃が主だったけど、これからは刀も使うんだから防具が必要だよね！
……ん？
だけどよく考えたら……俺って、防具必要か？
俺は、危ない時は自動で結界が張られるようになっているからだ。
でも、俺がいつまでも防具なしだと、みんなが気にしちゃうよね？
それならやっぱり、ここはカモフラージュのためにも買っておくかな！
「リッキーさん。服ももちろん買いますが、防具も必要ですよね？」
「ああ、心臓や腹以外にも、脛や肘下を守るものは最低限あった方がいいな」
そう言ったリッキーさんは、店の奥に声をかける。

「すみません！　服と防具を購入したいんですが！」
すると奥から体格のいい店員さんが出てきた。
その背格好からすると、もしかして元冒険者だろうか？
「すみませんが、この子に服と防具を買いたいんですが、見繕ってもらえますか？」
「あいよ！　このちっこい坊主のを選べばいいんだな？　まずは……坊主の役職はなんだ？」
それを聞いて、俺は思わず固まった。
あれ……？　俺って役職はなんだ？
「俺は……なんだろう？　前衛もこなすけど、遠距離でも魔法使うし……」
「とりあえず、前衛もこなすなら、あまり動きを阻害するような装備は駄目だな」
店員さんはそう言うと、俺の体を測り出した。
そして計測した数値を基準に、いくつかの防具や服を持ってきてテーブルの上に載せた。
「これが坊主が装備できそうなサイズのものだ。胸当てはもう装備しているから、肘下と脛のガードってところか？　もし今使っている胸当てじゃなくて腹もガードできるものがいいなら、こっちかな」
店員さんはそう言いながらさらに胴当てを一つ、テーブルの上に置く。
「さあ坊主、試着してみてくれや」
まずは脛、肘下のガードをつけてみる。

途中でつけ方が分からなくなったが、リッキーさんが教えてくれた。
これも早く自分だけでつけられるように覚えなきゃね！
それから、次は胴当てをつけてみる。
自分なりにやってみたんだが、どうやらつけ方が違うらしい。
またもやリッキーさんに指導してもらい、装備してみた。
「どうだ、シエル？　少し動いてみてくれ。きつくないか？　きついなら微調整するが」
俺はそう言われて刀を振る仕草をしてみた。
うん、大丈夫そうだね！
「大丈夫です！　あ、ちなみにきつい時はどこを緩めればいいんですか？」
「この紐を緩めればいいんだが、あまりゆるゆるだと、それはそれで危ないぞ。まぁ、最初のうちは俺が確認してやるよ」
そう言ってリッキーさんはニカッと笑った。
「じゃあ、次はこの胴当てをつけてみろや」
店員さんが胴当てを指さす。
胸当てを脱いで胴当てをつけてみると、胸当てと違って簡単だった。
スポッとかぶって、脇にある紐を結べばＯＫだからな。
胸当ての時と同じように、刀を振る仕草をしてみる。

なるほど、剣道の防具みたいな感じで、こっちの方が俺にはしっくり来るな。
「なんかこっちの方が俺的にはしっくりくるので、こっちがいいです」
「じゃあこの一式で決まりだな。あとはその下に着る服だが……試着できる場所はあるか？」
そうリッキーさんが店員さんに聞くと、店員さんは店の奥の方に連れていってくれた。
どうやら試着室があるらしい。
中に入って、店員さんが持ってきたインナーを一枚一枚着てみる。
どれも厚手で動きやすいデザインのもので、着て動いてみたがなんの問題もなかった。
全て試着してから出ると、姉さんが「あれ？」というような顔をしていた。
「どうしたの、姉さん？」
「私、紫恵琉が着替えたのを見れるかと思っていたのに、元の服を着ちゃったのね」
「なんだ、姉さんも見てみたかったの？　それならもう一回着てくるけど……どれもほぼ同じだよ？」
そして俺は改めて一枚着ては外に出て見せ……を四回繰り返した。
「どう？　みんな、ほぼ一緒でしょ？」
「……そうね」
姉さんはちょっと苦い顔をしていたが、冒険者の服なんてそんなもんだろ。
そこで俺はふと思いつく。

「あ、そうだ！　兄さんもたまに冒険するなら、防具は買っておかないとだよ！」
そうだよ、考えてみれば俺は腕輪があるから、防具は最悪なくても大丈夫だけど、兄さんはないとアウトだよ！
それを聞いた姉さんが「私もいるわ！」と言ったので、店員さんに二人の分も選んでもらうことに。
ついでに甥っ子の悠馬の分も欲しいと思い、俺と同じくらいのサイズなので俺の分として追加で二セット用意してもらった。
兄姉の分も全て揃えてもらうと、合計金額は金貨五枚だった。ということは、一セットが一万円ほどということだ。案外安いな。
どうしてこんなに安いのか聞いてみると、どうやら初心者用の装備らしく、安価な革を使っているからなんだそうな。
ベテラン冒険者はもっと質のいいものを扱う店に行くそうだ。
なるほど、俺が初心者だからリッキーさんはここを選んでくれたんだね。
そうだね、まずはつけることに慣れないとね！
兄さんも姉さんも、自分の冒険者用の服と防具を買えたからか、なんだかワクワクした顔をしている。
冒険が楽しみなんだね！

俺たちはその店をあとにして、次の店に向かった。
次も服屋さんだ。
今度は普段街に出る時なんかに着る服を買う予定。
さすがにずっと冒険者の服なのも……と思ったからだ。
リッキーさんが連れてきてくれた通りは、全部の店が服屋さんだった。
姉さんはそれを見て目を輝かせていたが、俺と兄さんはちょっと嫌な予感がしてしまった……
なぜなら姉さんはオシャレがとても好きで、こういう所に来ると買い物が長くなるからだ。
「……しまったな。こいつがいなければ早く終わったものを……」
兄さんは思わずといった感じで呟く。
……俺も同じ気持ちだ。
一人、意味が分からないといった顔をしているリッキーさんに「姉さんはこういう、服や靴などの小物を見るのが大好きなんですよ」と言うと、「あぁ～……」と言って苦い顔をした。
どうやらリリーさんも同じ感じらしく、買い物が長いのだそうな。
だからそういう時はエミリーさんにバトンタッチするんだって！
とりあえず姉さんは一番近い店から中に入っては見回し、自分好みの服を探していく。もちろん靴も。
しょうがないので姉さんには支払い役の俺がついて歩き、兄さんたちは二人で男性用の服を見に

行ってもらった。
支払いは一旦リッキーさんに立て替えてもらい、合流したら俺が払うことにしたのだ。
それからしばらく姉さんに付き合ったが……いや～、やっぱり姉さんの買い物は長い！
なんであんなに時間かけるんだろう……
とりあえず姉さんのこっちの世界での普段着が決まり、次はようやく俺の服……となった時に、合流時間になってしまった。
しょうがないのでとりあえず集合場所へ向かい、リッキーさんたちと合流する。
リッキーさんに兄さんの服の代金を聞いたら、いらないと言われてしまった。
どうやら姉さんの服にかなり使っただろうと思ったから、らしい。
まぁ確かにさっき買った防具並みに高かったけど……
するとリッキーさんから、兄さんの服はそんなにかからなかったから気にするなと改めて言われてしまった。
「ところでシエルの服は買えたのか？」
「……いいえ」
どうやらこの一言で理解したらしい。
リッキーさんはやれやれという顔で、一つため息をついた。
「じゃあこれからシエルの服を見に行こう」

彼のその言葉で、なぜか子ども服が売っている店へ行くことになった。
俺、そんなに小さくないはずなんだけどなぁ？
……そう思っていたけど、こっちの子どもはみんな大きいようだ。
店の中に入ると、あちこちで親と一緒にいる子どもに遭遇。
みんな俺と同じか、もっと大きかった……
「しーちゃんにはこれが似合うんじゃない？」
そんなことを言いながら、姉さんが俺に服を選んでくれる。
そして俺は再び着せ替え人形のごとく、試着室で着替えては見せてをしばらく繰り返した。
俺は服にあまり頓着しないから、姉さんが選んでくれたものを買った。
姉さんは俺の服を選べてホクホク、俺は試着疲れでヘトヘトだ。
会計が終わって外に出ると、リッキーさんがねぎらいを込めるように無言で俺の肩を叩いた。

続いて、今度は食器を見に行くことに。
俺が持っている食器はほぼ陶器なので、こちらの世界で主流の木製の食器が欲しいのだ。
土魔法で作ることもできるが、なんか気分的にも色的にもちょっと……と思ったのだ。
リッキーさんに連れていかれた店では、陶器だけでなく色んな種類の器が売られていて、その中に木製の器もあった。

俺はスープ用の大きな深皿を十枚とカレー用の平たい深皿を十枚、おかず用の幅十五センチくらいで深さが四センチほどの皿を十枚買った。
ここでの会計はリッキーさんが立て替え、パーティーの会計から出すことに。
会計を終えて店の外に出ると、リッキーさんから「他に行きたいところはないのか」と聞かれる。
俺が「ない」と答えようとしたら、姉さんが声を上げた。
「まだ時間があるなら、何かお土産にできる食べ物を買って帰りたいんだけど、何かいいものないかしら？」
リッキーさんはちょっと考えて、口を開いた。
「甘いのとしょっぱいの、どちらがいいですか？」
「う～ん……どちらかというとご飯系かしら？　でも甘いのでも大丈夫よ」
「じゃあまた屋台に戻って眺めてみます？」
「あら、それもいいわね！　じゃあみんなも行きましょう。ほら、兄さんも恵美さんに何かお土産を買って帰りなさいよ」
「……お前、その支払い、紫恵琉持ちだろう？　気にならないのか？」
「そりゃあ気になるけど、次にこっちへ来た時に冒険者活動をして、それでお金を稼いで返せばいいと思って」
苦い顔をして言った兄さんに対して、姉さんはあっけらかんと言い返した。

……なるほど、とりあえず返す気はあったんだね。
兄さんは眉間にシワを寄せつつ目を瞑って、ハァ～と長いため息をつくと「しょうがないな」と呟いた。
「すまないが紫惠琉、次に来た時にでも一緒に狩りに行かないか？　そこで得たものはお前にやるから、それで今回のことはチャラにしてもらえると助かる」
「いいよ、兄さん。兄さんはそんなに気にしなくていいよ。でも姉さんは気にしてね、いっぱい買い込んでるんだから！」
すると姉さんは「はぁ～い」と言いながらテヘペロしてきた。これ、絶対気にしてないよね!?
そんな感じで、屋台広場に行くまでの間は終始和やかムードで過ごした。
屋台広場に着くと、兄さんたちはさっき食べて美味しかったものや気になっていたものを買い込んでいく。
しばらく屋台巡りをすると、ようやく満足したらしいので宿へ戻った。

宿の入り口で、兄さんたちを見た女将（おかみ）さんから「あら、もしかして君の両親？」なんて聞かれたが、「兄姉です」と答えておいた。
兄妹にしては年齢が離れているように見えるからなのか、訝しげな顔をされたが、それ以上は聞かれなかった。

その代わり、二人分の宿代は請求されたけど。
二人はこの後元の世界に戻るので、さすがに部屋の中に入ったっきり出てこないとなると怪しまれるから、払うけどね！
う～ん、女将さんには明日の朝、二人は誰にも告げずにチェックアウトしたとでも言えばいいかな？
俺の部屋前でリッキーさんに今日のお礼を伝えて別れ、三人で部屋に入る。
「今日はあちこちに行ったけど、二人とも楽しめた？」
すると二人はとてもいい笑顔で頷いたので、それだけで俺も満足した。
「じゃあ、またな、紫惠琉。今度こっちに来る時はまた連絡するよ」
「分かった。また会えるのを楽しみにしているね」
「しーちゃん、また来るね！　元気で、怪我なんかしないでね！」
「うん、姉さんもね！」
言葉を交わし、二人は鞄の中へ。
今回は前回の反省をふまえて、姉さんから鞄の中へ入ることになった。
姉さんは拗（す）ねた顔をしながらも、手を振って中へ。
兄さんは呆れた顔をしながら鞄へ入っていった。

二人がいなくなってしまうと、この空間が途端に寂しくなる。
そんな俺の気持ちを察したのか、二人と入れ替わりにユーリが鞄から顔を出した。
俺が両腕を広げると、ユーリが俺の胸に飛び込んでくる。
俺は寂しい気持ちを胸に押し込め、ユーリの体を抱きしめた。
しばらく立ったままそうしていると、ドアの向こうからリッキーさんの声がした。
どうやら「夕飯を食べに行かないか」と声をかけに来たらしい。
俺は「今、行きます！」と返事をすると、ユーリに鞄に入ってもらい、その鞄を持ってドアへと向かった。
部屋の外に出ると、リッキーさんとスコットさんが待っていた。
「シエル、二人はもう帰ったのか？」
スコットさんが尋ねてきた。
「ええ、さっき帰りました。今日はとても楽しかったそうで、俺もホッとしました」
「それは良かった。さっき俺もリッキーから話を聞いたんだが、二人ともシエルとそっくりで、仲が良かったそうだな」
「ええ、うちの兄姉はみんな似ているんですよね。三人とも配色は母親似なんですよ」
「配色って…その髪と目の色のことか？」
「ええ、そうです」

「なるほどなぁ……まぁ、そのうち会わせてくれるんだろ？　楽しみにしているさ！」
スコットさんはそう言って俺の背中をポンポンと叩いた。
そうだね、そのうちみんなに会わせられるといいな！
それから三人で食堂へ降りる。
他の二人は先にいるらしい。
中に入ると二人がテーブルを取ってくれていた。
「お帰り、シエル。二人との買い物は楽しかった？」
「ええ、とてもいい買い物ができましたよ！　みんなで使う食器とか、俺の普段着とか、色々買ってきました」
「それは良かったわね！　特に服のことは気になっていたのよ。これでシエルも同じ服を着なくて済むわね」
「ええ、そうですね。ところで皆さんは今日何をしていたんですか？」
俺はエミリーさんと話しつつ、テーブルに座る。
それぞれ注文を済ませてから、リリーさんが教えてくれた。
「私たちは屋台でご飯を食べた後、防具を見に行っていたの。この前のオーク討伐で少し破れたところもあったから。私たちもいい買い物ができたわよ」
「そうね、入ってきた報酬で付与魔法のついた防具を購入できたしね。あれはいい買い物だっ

たわ」
なるほど、上位の冒険者になると、そんな防具を使うようになるんだね！
俺もそんな冒険者になれるように頑張らなくちゃ！
それからも色んな話をしているうちに、料理が運ばれてくる。
どうやらオークの肉ばかりだとお客さんも飽きてくるようで、いつの間にか食堂のメニューがオークだけじゃなくなっていたんだ。
俺はブラウンブルの肉を使ったブルシチューを選んだ。
スコットさんたち男性陣はブラウンブルのステーキを、女性陣はチキンらしき肉の照り焼きを頼んでいた。
そうだ、今度チキンの照り焼きも作ろう！
俺はブルシチューをスプーンですくい、一口食べる。
デミグラスソースのような深い旨味のある濃いソースで長時間煮込まれたブル肉が、口の中でほろほろとほどけていく。
……美味いなぁ～！
ブラウンブルって、どこに生息しているんだろう？
近場ならみんなで狩りに行くのもありか？
自分たちで狩れば、食べ放題だよ！

俺がそう思ってニヤニヤしていると、リッキーさんが「ブフッ！」と噴き出しそうになっていた。
「……ゴホッ、ブラウンブルは西門から出てすぐの森の手前の平野にいるぞ。集団でいるから、一頭狩ろうとすると、その他のブルが助けようと襲ってくるんだ。だから狩るなら何頭もいっぺんにいかないといけないから、危険だぞ？　それでも行くのか？」
「……少し考えます」
リッキーさんの言葉を聞いて俺が尻込みすると、スコットさんも俺が何を考えたのか分かったようだ。
「食べたいのなら、明日ゴーダおじさんのところに行った後、試し切りも兼ねて狩りに行ってみるか？　前回はシエルだけ狩らなかったし、ちょうどいい」
「そういえばそうだな。俺もおっちゃんが刀を作ってくれてるはずだし、試し切りにちょうどいいな」
「じゃあ明日はその二つだけこなして、明後日にルーシェさんのところに行くか？」
「そうだな、出発は明後日にするか」
スコットさんとリッキーさんはそう話しながら、ニヤニヤし出す。よほど楽しみらしい。
というわけで、明日はゴーダさんの所に行き、それからブラウンブル狩りに行くことになった。
……クフフ、ブル狩り、楽しみだな！
ゴーダさんの先祖が作った刀、どんな感じなんだろう？

夕飯を食べ終わった俺たちは、各自部屋へ。
俺も部屋に戻ると、ユーリが鞄から飛び出してきて、腹にくっついてきた。
『パパ、僕もおにぎり食べてみたいな！　今日の昼、みんなで食べてたでしょ？　僕も食べたいよ！』
ユーリは口からちょろっとよだれを垂らしながら、俺を見上げる。
俺は鞄に手を突っ込んでおにぎりを二個出すと、一個をユーリの口元に持っていってやる。
するとユーリは嬉しそうにおにぎりに齧りついて食べ始めた。
おにぎり二個を食べ終わるのにそんなに時間はかからず、ユーリが少し物足りなそうだったので、唐揚げも五個ほど皿に入れてテーブルの上に出してやる。
するとユーリは嬉しそうにテーブルに移動して食べ始めた。
……小柄なのに、意外と食べるねぇ。
でも考えてみれば、本来のユーリの大きさからすれば少食なのか？
そんなふうにユーリを眺めていたら、山田から連絡が来た。
どうやら兄さんからお土産としてこちらの屋台飯をもらったらしく、『そっちの飯も意外と美味いな！　ありがとうな！』とあった。
口に合ったようで良かったよ。

この二連休、山田にはホントにお世話になったからな。
あ、そうだ！
こうやって物を向こうに送れるんだから、辞表は提出してもらったけど俺の字で会社に手紙を書くかな。
直属の上司にはとても可愛がってもらってお世話になったしね。
それから俺は上司宛てに「辞表、直接書けなくてすみません。どうにもできない事情で会社にも顔を出すことができなくなりました。今まで大変お世話になりました。これからも皆さん体にお気をつけて、仕事を頑張ってください」と、異世界に来た時に持っていた仕事用の鞄に入っていた便箋セットを使って手紙を書いた。
これを明日、山田に届けてもらおう。
またもやお世話になるが、会社にはこれが最後の挨拶になるから許してほしい。
その旨を山田に連絡し、手紙のことを頼んだ。
さて、明日はこっちもあっちもどうなるかな？

第二話　出発の準備

翌朝、早朝からみんなで朝食を取り、しっかり装備をつけてからゴーダさんのお店へ向かう。
かなり早い時間であるにもかかわらず、ゴーダさんは店を開けていた。
やはり鍛冶工房は朝が早いのかな？
店の中に入ると、前回と同じくリッキーさんが店の奥の方に向かって声をかける。
すると少ししてゴーダさんが一つの箱と、エミリーさんの短剣を持ってきた。
多分この箱の中身は、リッキーさんのために打った刀だろう。
「まず、エミリーに手入れをしておいた武器を返すな」
ゴーダさんはエミリーさんに短剣を手渡す。
エミリーさんは「ありがとう、ゴーダおじさん！」と言い、代金を支払った。
それからゴーダさんは、持っていた箱をリッキーさんに手渡す。
「これはリキ坊に頼まれていた刀だ。そこにいる坊主と同じ形の刀だぞ。俺の先祖ほどうまくは打てないが、それでもなかなか切れ味があるものには仕上がったから、リキ坊の旅の役に立つはずだ。大事にしろよ？」
ゴーダさんはにやりと笑いながら言い、リッキーさんに箱を開けるよう促した。
リッキーさんは言われた通りに箱を開け、中の刀を取り出す。
その刃はとても綺麗で、ゴーダさんの腕もご先祖様に並ぶくらいなんだと思わせた。
リッキーさんはその刀に見惚れていたが、ハッとするとゴーダさんに向き直り、頭を下げた。
「おっちゃん、俺のためにこんなにいい刀を打ってくれてありがとう！　一生大事にするよ！」
「いや、一生でなくていいぞ。気に入ったならまた打ってやるから。その代わり、手入れは必ず俺に任せろよ？　それだけは守ってもらいたい。せっかくいい出来のものなのに、この刀をよく知らないやつにいじられるのは我慢ならねぇんだ」
ゴーダさんが苦笑いをしながら言うと、リッキーさんは快諾した。
それからリッキーさんが料金を支払っていたのだが、どうやらゴーダさん、かなり低い価格でリッキーさんに譲ろうとしたらしい。
だがリッキーさんが「いい品物は相応の金額でないと、職人のためにならない」と言い張り、少なくとも言われた額の二倍を支払ったようだ。
満足げなリッキーさんとちょっと不満そうなゴーダさん。なんだか立場が逆転している気がするが、まぁ……それでいいんだろう。

立ち読みサンプル
はここまで